

ポストコロナのまちづくり

上智大学総合人間科学部教授

一般社団法人未来研究所臥龍代表理事

香取 照幸

今回のパンデミックで、人々の日常生活は大きく変容した。仕事は会社でするもの、毎日会社に通勤してそこで同僚と共に

仕事をして夜は家に帰って自分の時間を過ごす、そんな生活がロックダウン(日本の緊急事態宣言は「ロックダウン」ではなかったがほぼ同様の事態になった)で一変する。在宅勤務(リモートワーク)が普通の働き方になり、むしろ「ポストコロナの新常態」として定着しつつある。「オン」「オフ」の境目がなくなり、人々の時間の使い方、服装、食生活、購買行動、あらゆるものが大きく変わった。ポストコロナの世界は、もう旧に復することはないだろう。

行動制限が強化される中で、人々のコミュニケーションの姿も大きく変わった。日常生活の中でも対面での接触が減り、ソーシャルメディアの比重が大きく高まった。このことは、社会的生き物である人間の意識

に大きな影響を与える。地域社会の姿もまた変わっていくことになる。

国連の推計(2018)によれば、世界の人口の約55%は都市生活者で、2050年にはその比率は70%に達するという。これまで、都市化の課題といえば人口集中による渋滞・混雑・大気汚染などが指摘されてきたが、新型コロナウイルスによる行動制限によって問題状況が一変した。人々は、これまで当たり前前に思っていた生活様式、働き方、時間と空間の使い方、別の選択肢があることを知り、それを実体験することで、今までのライフスタイルのあり方が大きく見直されようとしている。

人々の行動様式が変われば、まちのあり方もまた変わる。新しい生活様式に即した新たな都市の形、まちづくりのニーズが生まれる。

コロナ前から、地球規模の文明の持続可

能性という視点から、脱炭素社会、SDGsが大きなテーマになっていたが、前回も前々回にも紹介したような、「等身大のまちづくり」の動きが欧州を中心に組み込まれている。

オーストラリア・メルボルン市は「20分生活圏」、パリ市は「15分生活圏」を掲げ、それぞれ徒歩や自転車から15分から20分の範囲で職場や学校、買い物、公園、病院など生活していく上で必要な都市機能に一通りアクセスできるように都市計画を進めている。ロンドンはずでに公共バス(例の赤いロンドンバス)を全てゼロエミッション車に切り替え、市内の主要幹線道路の車線を減らして自転車専用道や歩道に作り替えている。シンプルな交通手段が増えることは市民の健康促進と排気ガス削減につながる。今や多くの欧州諸国では中心市街への自動車乗り入れ制限が行われていて、これに



香取 照幸

かとり てるゆき

プロフィール

出身地 東京都
生年月日 1956年10月3日
上智大学総合人間科学部教授
一般社団法人未来研究所臥龍代表理事

【学歴】

1980年 3月 東京大学法学部卒

【職歴】

1980年 4月 厚生省入省
1980年 5月 厚生省保険局国民健康保険課
1983年 2月 在フランスOECD(経済協力開発機構)事務局研究員(医療プロジェクト担当)
1990年 4月 埼玉県生活福祉部老人福祉課長
1992年 4月 厚生省保険局国民健康保険課課長補佐
1996年 7月 厚生省高齢者介護対策本部事務局次長
1998年 4月 厚生省大臣官房組織再編準備室次長
2001年 1月 内閣府参事官(経済財政諮問会議事務局)
2001年 5月 内閣官房内閣参事官(総理大臣官邸)
2008年 2月 内閣官房内閣参事官併任(社会保障国民会議事務局)
2010年 7月 厚生労働省政策統括官(社会保障担当)
2010年 11月 内閣官房内閣審議官併任(社会保障・税一体改革担当)
2012年 9月 厚生労働省年金局長
2015年 10月 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長
2016年 6月 退官
2017年 3月 在アゼルバイジャン共和国駐劄日本国特命全権大使
2020年 4月 上智大学総合人間科学部教授
2020年 8月 一般社団法人未来研究所臥龍代表理事

【公職】

日本年金学会会員、日本医師会 医療政策会議委員、日本地域包括ケア学会評議員など

【著書】

「介護保険制度史」(共著)「教養としての社会保障」
「民主主義のための社会保障」(いずれも東洋経済新報社)

よって市民がまちなかに集い、活気を取り戻している。路面電車が復活している都市も数多くある。

自宅や近隣のカフェ、ワークスペースなどを利用したテレワーク、シェアオフィス、働きながら休暇も取るワーケーションなど、働き方の多様化と分散化が進み、人々が自分の仕事と生活の状況(仕事の内容や子育て・介護など)に応じて仕事をする場所と時間を選ぶようになると、仕事と生活が同じ

生活圏域の中で営まれるようになっていく。

そうなれば、住宅地とは夜だけ人々が帰ってくるようなベッドタウンではなく、地域社会で生活が完結していくような、新たなまちのあり方が形作られていくだろうし、そうしていかねばならなくなる。

等身大のまちは、これまでのような、都市への人口密集によるデメリットが改善されるだけでなく、さまざまな世代、さまざまなライフスタイルの人たち、子どもや高齢

者など多世代が共存する空間を生み出す。このことは私たちが目指す地域包括ケアアシテムの実現にもつながる。

「暮らし」を中心に組み立てられる新しい地域社会こそが、ポストコロナの新しいまちの姿になることを確信している。

記事提供 社会保険出版社